

会 議 記 録

次の審議会（協議会）を下記のとおり開催しましたので報告します。

審議会等名称	平成30年度第 1 回近江八幡市未来づくりキャンパス推進会議		
開催日時	平成30年5月22日(火) 14:00～15:30		
開催場所	市役所 4 階 第 1 委員会室		
出席者 ※会長等○ 副会長等○	●出席者（敬称略） 委員 青木勝治、遠藤良則、小川平夫、白石昇、高木敏弘、仁連孝昭、 ◎横山幸司 ●職務により出席したもの 総合政策部政策推進課 課長・太田明文、課長補佐・栄畑朝夕美、副主幹・森津豊、 主事・橘直樹		
次回開催予定日	未定		
問い合わせ先	所属名、担当者名 総合政策部政策推進課 橘 電話番号 0748-36-5527 メールアドレス 010202@city.omihachiman.lg.jp		
会議記録	発言記録 ・ 要約	要約 した 理由	
内容	別紙のとおり		

担当課⇒総務課

1 開会

【あいさつ】横山座長

2 平成 30 年度取組方針について

【説明】事務局（橋主事）

【意見交換】

座長	事務局の説明の背景について、私から補足をしたい。 例えば、交通、空き家、耕作放棄田など地域の様々な問題に対し、自分たちの力で、起業という手法により解決すること、ここでは社会起業と呼んでいる。 古き良き日本の道徳、いわば人々の無償の善意だけでは立ち行かなくなっている問題を、儲けるという観点ではなく、持続可能な取組をすることで解決していくこと、その手法について、学ぶ機会はこれまでなかった。 本事業は、最近ではコミュニティ・ビジネスやソーシャル・ビジネスとも呼ばれているそれらについて、学ぶ場を提供する試みである。 これまで2年間、取組んできて、課題が明らかになってきた。 1つは、学ぶ場を提供したものの、実際の事業化に繋がりがきいていないという点。その理由としては、講師陣を含め十分な学びを提供できなかったという点、自治会やまちづくり協議会などの実際に課題を抱えている現場へのアプローチが弱かったという点が考えられる。 もう1つは、せっかく学んでいただいた人材をどう地域で活かしていくか、どのようにフォローアップしていくかという点である。 この2点について、今年度は、個別支援に重点を置き、中間支援的な役割を強化していくという説明があったところである。事務局からの提案をたたき台として、委員の皆様からご意見を賜りたい。
委員	受講生の取組について、より実践につなげるのであれば、塾の枠組を外して、個別に支援をしていくような仕組みが必要だろう。
委員	1期・2期の修了生について、現在どのような活動をしているか、説明してほしい。 1期・2期ともに意欲のある素晴らしい受講生が集まったと思う。期間中に事業化には至っていないが、今年度は彼らを更にレベルアップさせるという発想が良いと思う。 私の経験から、地域活動をビジネス化することは、本当に難しい。例えば、安土城のお堀巡りに10年間取組んでいるが、経済的な利益は得られていない。それでも続けているのは精神的、あるいは心の利益があるから。 地域の経済界も団塊の世代が引退しつつあり、廃業が進んでいる。その中で、新たなビジネスを起こすことは、かなり大変だ。 まずは、1期・2期の中から成功例となるようなスターを作ることが必要。そのことで、本事業への関心も高まり、今後、地域で活動をする人たちの励みにもなる。
座長 委員	既に経験してもらった1期・2期生に再入塾してもらうことは可能ではないか。 最終年度として結果を求めていくのであれば、1期・2期生、経験者などを対象とした、チームを厳選して始めるのが良い。その方が、支える側、支えられる側の双方に実りがある。

委 員	1期・2期と全く同じことをやっても、同じ結果にしかならないと思う。 また、今回も8月スタートを前提として、成功事例を生み出すのであれば、既に動いている活動をサポートするしかないように思う。事業を育てるのではなく、プレゼンテーションのスキルを身に付けるような人材育成を目的とするのであれば、1期・2期同様のカリキュラムで十分にも感じる。
座 長	既にまちづくりの活動をされている地域の方々と、本事業に参加してもらえそうな方々はいらっしゃるか。
委 員	スケジュールについて、8月からのスタートでは遅いと感じた。 例えば、2期の取組であった町家の活用は、展開がイメージしやすく、今年もう少し力を入れれば事業化できそうな印象だ。そういったものでなければ、半年間は短すぎるだろう。 私の地元でも歴史資料館を運営しているが、近年、入館者が減っており苦慮している。また、コミュニティセンターで1コインカフェも行っているが、経営的に自立させるのは難しい。 その他、高齢者の買い物支援も近所の人間関係の中で少しずつ取組んでいるが、事業として成立するところに至っていないので、昨年のような講座形式であれば、聞きたいと思う人がいるかもしれない。
座 長	委員がおっしゃった課題は、いずれも本事業のテーマに適うものだ。例えば、1コインカフェについて、儲けるという視点ではなく、持続可能とするという視点で、どのような取組が必要か、こういった点を学んでいただくことができると思う。 協働のまちづくりの観点から、地域との協働をテーマにすることも出来るのではないか。
委 員	昨年度、市民自治基本計画を策定した際にも、中間支援の必要性が議論されたが、未だ実現に至っていない。 近江八幡市は、これまで、自治の精神に基づく活発な市民活動が行われてきており、各地域団体においても非常に熱心な活動がなされてきたが、高齢化や担い手不足という課題を抱えている。 そういった中で、地域の課題について、NPO等の地域団体以外の主体が取組むことや、ビジネスの手法で取組むという考えが浸透していないのが現状である。まずは、そういった意識の壁を解消していくことが必要と考えており、その点に取組みたい。
委 員	これまでの経験から、地域の力だけで解決することは不可能だと感じている。 見慣れた景色の中では、新たなことができないので、他地域で取組まれている最先端を紹介することで刺激になると思う。外の人材の活用が大切であり、地域資源活用塾においても、全国に募集を行うべきである。 地域資源の活用について、例えば、“むべ”については、コミュニティ・ビジネスとして大きな可能性があると思うが、担当課からの支援が薄い。また、町家の活用については、まちづくり会社に委託をしているが、所有権の問題があり進んでいない。こういった課題について、本事業と連動させるなど、行政内部でも横の連携を図ってほしい。
事 務 局	1期・2期生のフォローや外部からの人材受入れについては、しっかりと進めたい。
座 長	開始の時期や講座の回数等は、まだ固まっておらず、精査が必要であるが、皆さんの考えをお聞きし、企画の方向性としては、これで良いという印象である。いかがか。 <異議なし>

座長	そのほか、企画の肉付けになるような助言をいただきたい。
委員	1期・2期の反省点として、期間の設定が短すぎたという点がある。行政の事業年度の枠組の中では難しいとは思いますが、改善の余地があるだろう。
座長	開始の時期をもう少し早める等の工夫が必要だ。
委員	参加者として想定されている実践者が、この事業のスキームに乗るメリットをもう少し説明していく必要があるだろう。
委員	成功モデルをつくることに軸足を置くか、広く人材育成を行うか、整理が必要。
委員	ターゲットとして、1期・2期生がなり得るのであれば、彼らのレベルアップに特化する方法がある。3年間トータルで成功例を作るという発想だ。成功することで次に繋がる。
委員	新しいことをやりつつ、深めるというのは、事務局の負担も大きい。限られた資源を集中的に投入するという発想で、割り切るのも1つの考えだ。
座長	今年で一定の区切りをという話であるが、参加者の立場であれば、来年度にどのようなフォローがあるかが気になるところだ。
委員	交付金事業としては、今年が最終年度であるが、必要な事業であれば、何らかの形で継続していただきたいというのが、本会の考えである。
事務局	昨年度の成果発表会について、良いものであった。あのようなプレゼンテーションができる人材が生まれたということでは、成果にならないか。国に何らかの報告が必要なのか。
委員	具体的にどのような成果が必要であるか、また国への報告についても定めはないが、市民にしっかり説明できる内容としなければならないという意識で取組んでいる。
座長	中間支援のあり方としては、社会起業に特化するのではなく、もう少し幅広く、地域団体の支援も必要とされていると思う。
委員	また、中間支援の組織を設ける場合も、行政の中に置く方が良いか、外の団体にお願いした方が良いか、専門性、継続性を踏まえ、今年1年かけて研究していきたい。
座長	中間支援の組織にはどのような機能、資質が必要か。
委員	まず、経営者の感覚。それから幅広い人脈が必要になるだろう。単なる営利目的ではなく、近江商人の三方よしの感覚を持った人、組織が望ましいと思う。例えば、東京等の都市部で成功した方が、帰郷して社会に貢献していただくようなことがあれば、理想的だ。
座長	不足する資源については、本会を始め色々な機関が入って補っていくことが必要だろう。
事務局	他に意見がなければ、本日は以上とする。
事務局	次回は、本日いただいた意見を整理し、より具体的な計画を策定した後に、改めてご案内させていただく。
座長	本日の議論を踏まえ、最終的な今年度計画案については、何らかの方法で委員の皆さんと共有したい。

<終了>